



令和7年度
茨城県優良図書紹介【高校生・勤労青少年向け】



『銀河の図書室』 名取佐和子（実業之日本社）

風見先輩は、なぜ突然登校しなくなったのか。手がかりは、先輩からの《ほんとうの幸いは、遠い》というメッセージだけ。宮沢賢治の作品を手がかりにしながら、先輩の謎に迫る「イーハト一部」の部員たちの物語。



『君はどう生きるか』 鴻上尚史（講談社）

小学校や高校の国語の教科書に文章が掲載されている作者。鴻上尚史氏からの多様性の時代を「どう生きるか」のアドバイス。読み進めながら、「なるほど」「そうすれば良いのか」の回数が増えていく。



『オリオンは静かに詠う』 村崎なぎこ (小学館)

ろう学校高等部に通う咲季と、コーダのカナと、咲季の担任臼田先生と、カフェオーナーで競技かるた読手のママン。4人の視点で紡がれる、果敢に“聴こえる世界”に挑戦していく聴覚障害×競技かるたの読后感爽やかな小説。



『僕には鳥の言葉がわかる』 鈴木俊貴 (小学館)

この本を読んでいると、作者と一緒に森の中で、ワクワクしながら大好きな鳥の研究をしている気持ちになってしまう。鳥の「言葉」を聴きながら、木陰で読んでみるのも一興。



『「コーダ」のぼくが見る世界
聴こえない親のもとに生まれて』

五十嵐大 (紀伊國屋書店)

「困っていることはありませんか？」なぜか、そう尋ねています。なんの違和感も抱かずに。インクルーシブに関する「聞いた」「わかった」「体験した」の、その先を。深く考えるためにぜひ、対峙して欲しい一冊です。